

第2章

木育活動の生成

第1節 | 北海道木育推進プロジェクト

1.1 木育の生成の経緯と理念

歴史的に見ると「木育」は、2004年度に北海道において発足した「木育推進プロジェクトチーム」の中で検討され、生まれた言葉（造語）である。その後、2007年度には林野庁の「木づかい運動」の中に「木育」が新たに加えられた。現在、木育は全国に広がりつつある。たとえば、北海道では木育のテキストの開発や研修、秋田県では高校生を対象とした「木育スクール」、岐阜県では「木育のいっほ」として木育プログラム集や推進員の認定制度、熊本県ではテキストの開発と研修・認定制度、ものづくり教室の開催などがある。その他、埼玉県、島根県、宮崎県で各県の特色を生かした取組みがなされるようになった。

本節では、北海道で「木育」が開始された経緯について概観する。2004年9月6日に、北海道庁において、水産林務部木材振興課の「協働型政策検討システム推進事業」の一環として木育推進プロジェクト会議(第1回)が開催された。これは、道産の木材需要拡大が最終目的にあり、それを林業関係機関・関係者だけに止まらず協働して、需要拡大を目指すプロジェクトであった。第1回目の会議では、「木育」の意義、理念、検討の方向などについて審議された。参加者は、実務家として5人、公募道民として4人、公募

市町村職員として2人、公募道職員1人、関係部局職員3人、事務局2人の合計17人であった。職種から見ると公務員が8人で、水産林務部木材振興課、知事政策部（政策企画）、緑化環境部公園と花の課、企画商工課、教育庁生涯学習部小中・特殊教育課、保健福祉部子ども未来づくり推進室（子育て支援）、北海道立林産試験場の所属となる。教育関係者として、短期大学保育科（美術担当）、学校法人理事、また、NPO法人では、子育て、環境、地域おこしに関連する団体、企業としては、住宅・木製品の製作、木工作家、事務用品販売、出版社などであった。

これらは、水産林務部木材振興課が目指す「木育」に関連した人員構成であると言える。中心は木材の需要拡大であり、それに教育や子育てという視点から道民の木材需要拡大に対する理解と行動の変容を目指していた。プロジェクトのリーダーとして（財）北海道環境財団理事長を配置し、環境保全活動や環境教育的な色合いも強い。

北海道木育推進プロジェクトで検討された「木育」の理念は、「子どもをはじめとするすべての人が木を身近に使っていくことを通じて、人と、木や森との関わりを主体的に考えられる豊かな心を育むこと」とし、木育を通して心や人間を育てるとしている。この理念が構成された段階では、木材需要拡大についての言及はなく、人間としての豊かな心や感性の向上を目指す人間教育について主眼が置かれている。さらに、「ただ単にじっとしたまま考えるだけでは育っていかない」、「木を使って、様々な経験を通した行動が必要である」と述べられ、木を使った活動や森林における活動も重視している。

北海道では、「木を身近に使っていく」ための多種多様で具体的な活動を伴った木育のプログラムが考案され、道民へ提供されている。これらの中では、木育の理念がよく分かる活動プログラムや先進的なプログラムが開発され実践されている。このような北海道における木育は、全国に先駆けた事例として、国民運動としての「木育」の発展に影響を与えた。

1.2 北海道での木育の取組み

北海道木育推進プロジェクトでは、「木育がめざすもの」として、以下の4点を挙げている〔煙山・西川 2008〕。

- ①五感とひびきあう感性を育む：木と五感で触れあい、手づくり、考える経験を通して人と自然に対する「思いやり」と「優しさ」を育みます。
- ②共感を分かち合えうる人づくりをめざす：身近な人と木で遊び、木に学び、モノをつくる経験を通じて楽しさや喜びを共感し、地域や社会、産業への関心につなげます。
- ③地域の個性を生かした木の文化を育む：地域の森や木の良さを見直し、木が身近にある北海道ならではの暮らしや文化を提案します。
- ④人と自然が共存できる社会をめざす：循環利用が可能な資源である木の可能性や、森と木に携わる仕事のすばらしさを伝え、持続可能な未来へ向けた社会をめざします。

また、木育が取り組むフィールドとして、以下の3つを挙げている。

- ①感性や社会性を育む
 - ・木製遊具や木の道具などに触れ親しむことによる五感の育成
 - ・森林に親しむことによる情緒の育成
 - ・森や木による「遊ぶ力」と社会性の育成
 - ・木や緑に囲まれた施設、住環境、街並みや景観の形成
- ②人と木のつながりを育む
 - ・北海道の木の文化や技術の再発見・再評価と伝承
 - ・木材と地球環境に関する知識の向上
 - ・木によるモノづくり教育の推進
 - ・つくり手と買い手、使い手の顔の見える関係づくり
- ③人と森のつながりを育む
 - ・森林づくりと木材生産・利用のサイクルの理解に向けた森林体験や学